



新編熊阪説書

三

A13  
4443  
3





113  
4443  
3

# 金又丹

## 新編熊阪説話卷之三

武江



感和亭鬼武著

○於鞍馬山牛若丸生育之伝  
傳 金價人三条橋次女児于牛若丸急收



めいと竹更もむしりおろり。源平あ家の整留花もむば梅橋四季  
みらば春秋月雪の流のいづとどと争いしに保えの乳まゝ平  
氏一統の云とめぬまげに俣加鞍馬山は三月五なる。た馬頭  
源義朝の九男牛若丸の生育成たつぬるふ。義朝亡びて后に  
ま流と守えしと常盤の前貞探成棄く貞女の道とたて平  
盛のまに後づい。牛若丸を流のまどと多く致と竹まは漸く  
流聖皆海りてま流と着め牛若小出家とせむやと。鞍馬山の

新編熊阪説話卷之三

一



東莞坊阿闍利アツカリは送るおく御みめらる。室むろにあめて東莞坊ハ牛うしはるる  
いたらり。受うけれはるるく。受うけへ愈いせしに一ひととすて十ととす。かゝの才さい智ち其その  
業わざ諸しよ人ひとは揚あげたるとす。ぢるに牛うし若わ丸まる十二じふに本ほんとありしに。其その  
掲か此この聖せい義ぎは考かうぶへ。思しふと画かくしうに。是非ぜいひ一回いっぺんハ年ねん氏しは必かならず  
父ちち祖その仇あつと報ういんものものとありい。まにつけても。何なん年ねん武ぶ義ぎと學まなぶと  
心こころかうと。世よ間かんと。情なさけのぬまは。晴はるは。鞍くら馬まの奥おく貴き明めい神しんハ。百ひゃく日じつ  
糸いと新あたらし新あたらしせむと。毎まい日にち一ひと個こ係かるる及および行いくので。ゆに往ゆ路ろ州しゆ  
本ほん生せい衣い王わう。とけて僧そう正しやう谷たにのま。うら。白しろ日じつど。物もの凄せく岩いわ脚きゃくへ古こ本ほん  
杖つゑと。糸いとを。袋ふくろと。うら。さ。ひぬる。如ごとく。ま。ま。と。牛うし若わ丸まる。は。只ただ願ねん原げん家け  
再また奥おくの大だい志しと。懐くわいけ。は。お。路ろの物もの沸わく。とも。ま。ま。と。ま。ま。と。雨あめ風かぜ  
の。お。とい。ども。厭いとひ。ま。く。お。く。糸いと新あたらし。做しよし。う。ま。ま。と。け。路ろ。往ゆに。

ハ山やま猿ざる許あま多た群ぐん集あつる。后のちて。毎まい日にち牛うし若わ丸まる通とほる。以もて。登のぼる。と。又また海うみ  
ろ。や。お。く。の。猿ざるども。山やま回まわ指ささ。ど。に。出でて。牛うし若わ丸まると。相あ議ぎし。あ。う。ハ  
威いし。又またハ。詠えいう。し。厭いとさ。う。う。ま。ま。と。一ひと公こう堅けん志しは。じ。て。大だい太たい太たいの  
牛うし若わ丸まる。心こころ中ちゆうハ。歌うた笑わらひ。眼めも。止とどま。ハ。す。後のちハ。これ。と。お。路ろ  
の。友ともと。ま。ま。と。つ。け。の。う。ま。と。早はや晚ふし猿ざるも。毎まい日にちお。の。ま。に。列らて。ま。ま。と。ち。の。い。と。く  
ふ。あ。ひ。ら。る。ふ。や。牛うし若わ丸まる。と。俱ともに。送おくる。途みちひ。と。海うみ。却かへて。山やま中ちゆうの。ま。ま。と。し  
と。と。捕とらふ。又また牛うし若わ丸まる。貴き船せんの。紳しん。本ほんに。誓ちかつ。て。武ぶ義ぎと。修しゆし。う。ま。と。  
猿ざるども。け。さ。い。似にと。せ。る。と。て。自みづから。武ぶ義ぎの。友ともと。あ。り。ら。る。ま。ま。と。牛うし若わ丸まる。と。是  
後のち侍しやくと。お。く。山やま猿ざると。付あり。ま。ま。と。海うみ。陰かげ剣けんの。術じゆつと。修しゆし。あ。う。ふ。高たか山  
丸まる。とい。ども。賢けん如にょの。ま。ま。と。人ひと回まわる。ハ。跡あとま。い。る。ま。ま。と。凡たゞなる。牛うし若わ丸まる。  
の。武ぶ義ぎ。ま。ま。と。が。た。ら。ま。大だいひ。に。上のぼる。遠とほす。這こひ。と。へ。ま。ま。と。丸まる。内うち紳しんの。應おほ護ご







形もよや。後世に牛馬の鞍馬山にて天狗と対峙して武術  
 修行ありしことを傳へたるもの山猿のまうぐしとまは月日に雲  
 守なく牛馬丸十五家とやらせたす。以源家旧恩の常陸坊  
 海存とへるもの晴は鞍馬山は思ひまう牛馬丸に對面して一  
 らく都近きところにて在して平家のためには大あらん陸奥國の  
 住人市籠権太郎秀衝は源家恩顧の武士田へを後と傳へる憑  
 める時のかみらす麻略あるべうらざるよと遠より家も那國に  
 まう。秀衝は自身の上と憑と金中さんと動じろふらして牛  
 馬丸にて鞍馬山と出るの公あまは。大いよ欣躍たまひ候ふ牛  
 馬丸とありしきに常陸坊海存はまう。奥品は到り秀衝  
 又對面す。牛馬丸のまを憑とくろふ。秀衝源氏旧恩の

者ままは。憑と候び。行幸して牛馬と奥品へ引取らんと  
 工風はぐらす折ら。まよ。以京三条の橋井の過に  
 任す。金價客。橋次季春とふあ。けものハ金狼の竹  
 流し。あるひハ棄金。砂金と交易のとき。隔年は陸奥は  
 拿下るよつと。自然と秀衝の用達とより。彼の所用は。洞入  
 ものままは。秀衝橋次の公。庭も。く。あ。う。う。へ。晴。は。梁。は。町  
 亭。以。后。奥。小。下。らん。胡。ハ。鞍。馬。山。ハ。青。丸。ハ。牛。馬。丸。と。將。て。は  
 う。ま。と。妻。細。と。中。倉。り。試。せ。一。小。う。り。橋。次。は。ま。と。か。け。折  
 と。も。て。牛。馬。丸。ハ。秀。衝。の。所。存。と。通。せ。と。や。と。ふ。り。人。と。も。平。氏  
 の。守。え。と。將。り。時。節。と。候。び。ひ。て。ぞ。あ。り。ぬ。  
 私。曰。け。橋。次。と。け。以。金。價。客。と。稱。する。状。と。尋。ぬ。る。よ。金。狼。の



竹流て入りの細を針金のさまして。丈八寸をりあるが。  
狭くて切容るものところ。又針がよりや。平目よりして。  
まも定まらば通称はさなり。ともいふ。形がよるも  
あるふや。執近世のふも限まど。再あるてくまど。是の  
かふまうせて切用。とま。極やまど。ハズく。今より云の  
賃掛るるり。はし。

右にて考ま。金買。摘次の。順に。棹金。小て。もちの。の。迎の。大  
る。棒金。と。即座。は。切て。用。ゆる。と。ほ。び。と。名。智。を。り。て。切。賃  
ぬ。ど。摘。以。の。利。徳。と。せ。い。や。又。は。ち。の。く。い。金。浪。山。多。け。れ。ど。  
山。り。り。出。せ。い。後。の。金。浪。の。連。と。と。ほ。び。よ。て。買。上。京。都。へ  
持。帰。り。金。浪。は。次。分。と。ほ。る。ふ。ま。金。砂。金。ま。ど。ふ。し。て。世。と。の

通用とせし。四。金買。摘次。と。り。ん。を。は。は。は。の。年。家。の。世。々。り  
ま。ま。の。六。波。羅。の。役。布。へ。摘。次。より。然。置。と。よ。て。も。出。せ。い。  
す。ふ。や。今。砂。金。と。い。へ。ど。も。尖。分。か。た。め。ら。る。もの。ま。ま。は。げ。り  
砂。金。ま。金。と。い。へ。る。も。皆。尖。分。或。は。丸。形。本。の。系。形。棹。金。ま。ど  
ふ。折。廻。り。り。の。ま。ま。し。

権。又。鞍。馬。山。の。毎。年。正。月。初。の。寅。の。日。系。備。多。く。ふ。ど。い。へ。る。こと。  
往。古。も。今。も。の。は。ら。ど。と。り。や。然。る。ま。け。日。摘。次。系。春。の。女。見。橋。本。と  
い。へ。る。と。お。て。初。寅。詣。は。鞍。馬。へ。到。り。折。ち。ら。ば。牛。若。子。は。射。西。に。  
秀。街。の。懸。と。述。ん。と。か。が。け。往。る。ふ。折。り。も。今。日。牛。若。丸。の  
母。堂。常。盤。市。系。は。法。堂。の。病。腦。折。然。の。た。ら。と。平。氏。の。武。士。は  
敷。む。こ。ま。ハ。牛。若。丸。は。相。見。く。志。の。び。清。と。供。人。僅。り。ま。も。



越る小到つ。東是坊のえよ。いそよまらむいし。牛  
 も後て久しき對面ありて。互々小欣悦當ふまことして。て。  
 常盤所前のゆらとと。牛若路の案内にて。送る出んた本  
 教又熊らひむひ。牛若母を盤よ迎ひて。晴らいらく。高利  
 原の坊のものと小て。物強く侍らんぞんせし。かど。他宇と原に。  
 是れをて。内供にまう。中よとと。一系ハ。這回法聖入道業病  
 小井所。昨日の念も討らまら。は。是究まの所。所まま。バ。  
 兼て常陸坊海存奥品秀術入道親子の者となの。置い。ハ。係  
 一之。彼地よ。及び。下り。秀術ハ。保氏恩顧の士。由。渠と。係。て。  
 源家。同恩の軍勢。成。程。没。ま。し。平家と。付。占。さん。と。お。り。い。友。  
 迫。さ。に。當。山。と。思。ひ。出。ま。ち。の。く。強。行。と。容。意。ハ。ま。せ。ど。も。牛。

若下山と。つ。へ。る。必。定。平家の。奴。原。母。君。と。入。質。と。は。ま。い。  
 ら。せ。ん。志。う。あ。る。と。さ。い。系。敵。の。と。く。源家。再。興。の。妨。げ。ま。ま。い。  
 竹。平。母。君。小。い。が。陸。の。國。源。栖。凌。之。助。重。頼。を。源。家。を。縁。  
 の。武士。ゆ。え。ま。ま。よ。え。ん。五。那。方。ま。で。為。さ。せ。ま。り。侍。い。重。頼。  
 這。回。都。の。左。番。明。近。く。當。國。後。足。し。う。け。た。ま。は。ま。巴。系。も。  
 渠。の。日。勢。よ。ま。ま。ま。ら。ぬ。後。より。就。ま。ら。ん。け。義。成。塔。人。と。思。は。れ。  
 侍。人。と。あ。り。け。ま。り。常。盤。の。あ。大。い。は。欣。躍。た。ま。い。そ。ま。ま。ら。む。  
 け。母。も。兼。て。の。念。教。保。三。奉。の。以。故。督。の。殿。長。田。よ。付。ま。り。い。  
 て。し。う。又。身。の。み。供。と。延。連。妾。が。銀。難。奉。若。せ。し。も。送。り。い。  
 平。家。よ。投。い。ま。し。則。法。聖。の。後。急。慕。そ。の。也。し。と。口。措。さ。た。と。ん。  
 いた。も。ま。ら。し。が。み。供。の。命。助。た。と。に。敵。法。聖。よ。け。身。を。ま。ら。せ。





竹編美反危古木



三

楠江娘  
年若丸小  
女  
母の  
年若丸小  
女



十と世といへる春秋を讀みよしとてくらせしも你等とぬ  
 させ父上の仇氏の恥辱清さんとかりかたり。然るに你的思ひ  
 立退那方よて結合さん公易く思ひまよと怠たまへば牛系  
 丸。まよこそを系が公よひるることなむ。下山をふも安堵の  
 かりい。あうあらばやうて那方よて。後合奉らんいりふも你も  
 前尾張ひがらハぬやうなとつけ。互の友の上全々入しとほど  
 ぬく對面とらばよと。又送り又ぬり親と子のんぬしと互列  
 とぬ。這時橋次親又連けぬへまよ。至て牛系丸と又ま  
 いらとまば。俸究竟と權し本義又勅諭と究りいあり  
 けらうら。牛系丸ハ常盤印前と看送り。立ぬらんと

ましとと。橋次の女兒橋本と儀又妙し。自出逐て大  
 地は結實低低しとへらく。板まぐら君よハ義朝公の由近  
 牛系君と又送りて。侍入ま。新中系ハ京三条の金貫  
 橋次と中者さる。後世のため隔年又佐與へ下り侍入  
 去々年某下向の刻。市館權太郎秀衛入通中とれん。  
 都鞍馬山よ義朝公の九男牛系丸をすり。す及ぶ。あはま  
 眞品ハ心裁あらば。一門多と秀衛。市親方よ附まいら。巴  
 ちのく。勢を催し。年家代付立し。源氏の旧恩を報いた  
 て。手ららん。汝明々。年下向の。砌ハ。が。何。も。勅。り。や。と。具。し  
 まいら。せよと。是。の。由。憑。と。容。易。ま。ら。る。密。奉。ま。ま。平  
 家の。中。へ。と。懼。ま。東。光。坊。の。方。へ。ま。り。て。中。と。ん。も。ま。を。ま。ぬ



由へ折と疑ひ今日も延引せしより又侍人など所  
 小て相見えまいらせ頼が大意にむすくと延引れり牛  
 若くは幼物と疑ひ看定めたまふ又言語相違あらざる  
 とまなまて其説をたしめて無むひいれ兼て興秀樹より  
 深栖凌之助重頼ともて同じ音信怪が小島より見せし  
 衛佐より其其の内通にちて予迫とて日を撰び候其の  
 志ありとすより橋次も大ひは欣悦あらはれ急げと  
 一列も疾くそよけま來つる三日の暮日成り君と俱に  
 費定まりし中ま今言ふも下山ありまづ頼が家に忍  
 びし内容を懸るべし其外万葉ハ某は任せしひと世  
 小たのりくは是が半若んも浮立ると今汝も争ふも偏に

貴船内神の加護と見えたり侍も能く討らひはんとせ  
 ぬ予ハ折の傍の邊を又念今言の中よ海の家と云ふ  
 私言ふはた二個の幼神橋次の女児橋本の本殿にありて  
 一宮ありし半若丸の藝々も教はせおし候はれまらぬ  
 たり知無に不恐傍へま立出まば這者何人と出る丸を  
 たまへハ橋次いごとり是よりハ即某の女児今日當山一將  
 まうまに此を半若もまゝ去來女児も此間見と父が言に  
 恥しく情熱をてちと突べ半若も橋本も挨拶ありて見  
 合寸教互ひは念ひ無竹やぶと海棠祓事の教い折と  
 て風情有り橋次ハ知らばとまはれ居ハ他眼もい  
 らぬ是ハ候とまぬらんがならず首尾も今言の中



家宅を紙あきと宿ふと妻一く惣至いとまけてまよ  
 まば。搦木いたゞ牛あま。うらみまこと怪まどく。牛あ  
 遠山道と。父もろともよぶと。牛あ。遠山道と。父も  
 這より旅行の容をせつと。まゆらんと。飯すまへ。家  
 日宿。禪林坊といつり。め。う。て。牛あ。の。災。難。う。る。よ。ん。と  
 よ。せ。又。も。千。本。と。搦。ま。ど。も。牛。若。諾。ま。い。ね。ば。不。俊。と。却  
 て。遠。恨。と。ま。う。ま。お。た。悪。僧。を。四。五。輩。か。た。ら。い。今。日。こ。ろ  
 牛。若。の。舌。と。ま。い。四。舌。とい。ま。う。ま。月。と。て。せ。ん。と。其。不。信。と  
 尋。ね。わ。く。け。ふ。へ。ま。う。り。し。が。牛。若。と。ま。る。う。り。も。禪。林。坊。進  
 一。い。い。牛。若。願。願。信。子。て。所。身。は。執。心。也。へ。搦。く。ま。う。ぐ  
 お。ま。ま。ま。ど。い。つ。と。も。難。而。愈。へ。ま。信。徒。とい。つ。も。願。尊。と

受をまうよ止くし。今日若舌とあらば災いひ忽此身よ至らん  
 色よと魚へあるや。何と。信。ひ。は。新。巻。律。統。卷。一。と。信。か。く  
 ま。ば。牛。若。可。く。と。抄。笑。ひ。信。の。身。に。て。通。ま。ら。ぬ。こ。り。掛。る  
 の。ま。ら。ま。伏。せ。ん。と。い。こ。と。終。笑。や。何。狂。人。と。も。你。若。ま。い。に。狂  
 せ。ど。遠。恨。ま。か。り。ら。ま。ま。ま。ま。ま。と。本。枝。と。ま。折。木。指。と。ま。て  
 侍。ま。い。と。ま。牛。若。中。ま。い。ふ。武。藝。力。量。と。も。搦。の。こ。の。因。に  
 平。家。と。亡。不。を。首。途。の。血。を。ん。け。悪。信。等。と。お。居。居。人。と。信  
 かけたまへ。禪林坊怒を改より。怪。も。熱。湯。は。入。る。痛  
 の。び。く。小。赤。面。して。改。と。ふ。ま。と。焼。し。その。心。ま。う。へ。ま。い。は。し  
 と。ま。ま。先。よ。拳。と。搦。て。掛。ると。跳。遠。ひ。と。ま。牛。若。丸。拿。た。ら。枝  
 こ。ま。ま。向。を。拜。歩。ふ。う。り。の。く。ば。眼。う。う。と。て。禪。林。坊。壹。一。歩。ふ

新編熊坂談話卷之三





山神の御座る  
まじりし  
山神の御座る  
まじりし  
まじりし

一山の悪俗  
午丸丸とよみ  
かんし  
かんし



倒すこと。又この子にて掛る悪俗系も其小せんと組取ども牛馬丸のそ待の早業。飛鳥のてくげうや天狗の傳のてせよいんとやすも直なるうま。けよ折川彼雨よ折居籠んとあせると何流より。芝と捲げて踢跟たまん。禪林坊を始りとして。傳のい不所谷底へま達上踢落とま。生死の程も知まがこ。心はし首途よし。このひまに牛馬丸の二夜に東京防のしとに到り。己が房室よ入し。よ石具とより集め。跡を見がらざるやうに。瓦洞でも暮らさば偉いと。房室の内よ一首の和歌と残し。あふ其方に。

わつらんぬらんとおちども。とらまよとせに。とらまよとまのわく。いけりて。およ。秘馬山と道と出せ。三条橋次のかと。

○鎌田玄衛道危難話

併 牛馬丸京都奈良路

殿島明神より。流盛よ持ちたる。平家重宝の羅刀。源家の武士よ興るよし。石清水八幡宮の告ありし。この後物祈り。この女のに。とさうり。渡て夫の難義とあり。播井内記とつる。頼女よ六波羅に投へらま。仇のしく。源氏之余。頼田兵衛。正法とあるうらうら。流云とめて人等を迷い。い。平家氏亡する企てならんと。狸池とさう。ぬ六波羅の裁判。栗田には。極まる。後田玄衛。夫婦のものと。横居まい。今。日斬罪し。妻の白状の切あま。罪を免し。きいすと。飛弾。

平家氏没す企てならんと



を即ぐ懐妊あり捌き口惜ながら正法に授けよの身は是非  
 もなくやぶつて流石の所末ぬと。是れ極りし公のうら思ひ  
 やりきて衣もさうり志うる小徳田を信の先妻の女児登  
 系としていま十三歳ありながら双親とも不討も六波羅  
 小投まじりしその方の家よりしごりし父の斬罪にす  
 悲しきふ前後も忘れあるもあらず粟田は元  
 王父の入り際よいとまをい。家身も備は死出の供と難れ  
 ども質と登米垣の外而もを付て。んまが表まの父のさる  
 今消る身とさる人も消るおひいよととと南く父と  
 兵衛さま。女児の登米よ侍しそや。授まじりたまひしり  
 神よ誓ひ佛よ祈り甲斐もなく。此形勢ハ何れを日毎

の責若とやうのさる事。まもものよ科あらば世界つ人の  
 皆殺うたらぬ毒が公もかく科の政道があるぞうおとい  
 おいおとす助けまいらす神仏人もなると竹垣にいーと  
 矢付後叫ぶ声小を周も流揺撥せさるる佃とまづこよ  
 止り。族こそ女児もさうりつま。是今生の列まとうる。を成坂の  
 そのもとの義なる悪癖の口一ツ。七子ハますとも。執殺さまぬ  
 世の誘平日公のさほしく海と佳しき女児をと。はらま  
 たり親とみの義理だまきらぬを後ものすこそこのうに巴が  
 身と道きんためよ系へ科と傷そり人の斬罪を死に  
 這ぬをば親ともいそ仇敵たき悪らくい柴めも俱は速速  
 連なる残念とよ。義祖公の所内を。後田兵衛と信と



りけ、父の果う。はまうと素目の恥辱。這皆條のこころれが  
 邪曲を遁のふよ是へ。安寝よの屋づらざと。懸跟る横  
 怒の形相妻ハ懼ろ、氣まもまう。さるいひ玉ひを。まもも  
 友と見たるの。此方の科。父より出せる。眼まも。地を根るや  
 もねく。何より。前の子の。物まうとあきらめて。今又未練に  
 妻へも。然ハ五智の。より。下て。未練の迷ひの。後ぞし。其はよ  
 間に念仏と称へ。美福の。是悟は。たま。後女児への。吾めり。  
 終し。と中。中へ。難面とハ。妻より。も。登本の。ん。羊。強も。り。で  
 分。隔。今。う。け。而。一。割。こ。ても。此。方。の。友。の。を。お。致。さ。吾。小。の。優。死  
 言も。掛。す。外。憂。願。と。能。氣。味。貞。の。憎。ら。し。さ。尤。討。隔。る  
 女。児。の。心。後。を。か。く。づ。と。や。う。も。は。け。后。と。ても。な。を。方。う。ん。け。方。に

親。み。と。も。し。ハ。ね。べ。父。ま。と。后。ハ。何。如。へ。う。り。と。公。の。ま。に。の。こ。ね  
 と。と。張。悪。非。及。の。後。母。根。生。女。児。の。な。と。も。細。小。ら。き。後。し。や  
 と。て。も。こ。ら。ハ。う。り。母。と。と。隔。ら。ら。ハ。あ。の。さ。う。も。あ。ら。ざ。れ。ど。  
 父。と。よ。ハ。や。が。て。此。方。の。友。の。後。は。存。生。た。ま。し。と。あ。る。う。り。に  
 父。上。の。余。波。流。傳。し。く。此。方。は。言。と。か。け。ざ。り。も。歎。ま。こ。た。ま。え  
 ま。と。回。へ。と。堪。へ。て。後。よ。母。と。と。ま。父。上。と。ぬ。う。へ。う。う。い。と  
 ど。後。り。の。此。方。ぞ。や。と。り。ね。づ。り。う。り。も。父。の。此。方。の。か。り。の。の。り。の  
 及。り。の。此。方。の。は。先。今。う。こ。ら。う。て。か。つ。つ。ね。げ。恨。ま。ハ。せ。ね。と。は。喘  
 や。情。さ。や。か。さ。し。や。と。不。足。の。泪。よ。此。方。さ。く。歎。く。女。児。よ。な。を。ね  
 ら。ま。し。う。り。の。て。是。悟。の。心。後。も。猶。は。恨。し。後。の。測。存。よ。後。ま。て  
 誰。い。も。あ。る。痛。は。し。や。と。一。日。よ。後。よ。表。ま。を。僅。し。ぬ。早。斬



罪の時別ごと行するうちの幕敷より立出る花弾を即  
 系連・検視の役と発見せしり。監押の者も亦近ひ。後田の  
 成娘只今もへ女に放らせしと言ひし。素解免  
 せ。兵衛が妻も比能事小とせし。是までの娘方さん  
 兵衛どのの義弟の初孫女也し。とも看えし。一遍の  
 回向も稱へまいらせんと。信は扱へし。面憎と。女也の想と  
 やらうと。今父との内を娘と。歎かひし。もぶさどや  
 内身の心も鬼の地。這ハ何とせん父と。助くる人はい  
 さぬ。今ぞ別々の名跡と。一他眼もきつず倒れし。  
 身も涙もろく。後沈む。歎さふも。一もあはざる。登米余  
 雨のふる眼も忍若し。と口と押へて。後母の泣も泣せぬ

邪見の拳勅。人をもに措。殘念と。齒喰切眼と。因親念  
 ねしたる。正法の後よ。いとやまお。ちりぬ。今や後田の  
 義弟どと。さらけ。白み。抱抄の。う。灌う。けて。揺揺。お七  
 了と。あま。六波羅。よ。強る。小。殺。一。さん。跑。せ。さ。小。せ。の。なる。因  
 系。與。市。る。との。早。抄。救。文。と。ろ。も。指。と。や。よ。人。く。斬。罪。ま。さ  
 き。よ。留。し。く。と。ひ。く。く。一。文。字。に。就。跟。て。る。系。殺。し。け  
 る。小。入。景。連。及。ふ。も。此。等。あ。ま。新。中。納。言。如。盛。卿。の。内。下。知。し  
 て。後。田。正。法。の。身。の。上。い。や。ご。罪。の。受。え。ま。し。白。状。も。ま。ま。さ。ま。正  
 志。く。平。家。と。し。る。べ。き。孫。身。の。詮。知。も。あ。ら。ず。ま。つ。つ。と。斬。罪。に  
 け。入。度。政。通。の。う。ら。さ。な。似。し。う。因。親。父。法。誓。と。へ。何。の。う。へ。死  
 刑。と。免。し。後。田。の。京。地。と。追。拂。ひ。亦。兵。衛。が。妻。の。ま。の。身。の。う。へ

新編熊坂訃言卷之三

十四





新編 義経伝 巻之三

三



関東と市お望御の  
旅をうけ経田は  
眼刑の場へ早す

新編 義経伝 巻之三

三



後ハ何程の事ありとも。渠の口より世とへ流布せし罪状うらと  
 せび百枚策退放と評定極まる。即ち終る所下知状也す  
 あまと言らうに。漢上とバ。案ハ相遠の飛彈を肩懸てたる  
 兵衛正法。是も及よりあらざるか。との舞足の踏所と忘る  
 親子の欣躍。まよ延留監押のもの。典市の指番よ支り。と  
 兵衛の妻の衣履と剥ぎ。赤塚して延倒し。情とも傍し。と  
 續お。策敷の重よ皮披け肉もやぶさて。渾くと流る鮮  
 血よ子と叫び。終入度回を泣けと。文へ息交えせば。後お居  
 半死半生血ハ。海津津。許多の看立正法も公地は。と。壺  
 小入ごともひと。小園系殿の。所執成所孔。か。と。ね。永居の。思と  
 妻と又棄て。女児と連け。知と。と。退る。々々。

は。後。後。田。兵。衛。正。法。ハ。牛。若。丸。ち。の。ふ。下。義。兵。と。あ。け  
 た。ま。し。と。ま。て。彼。地。ハ。靴。下。ら。ん。と。欲。を。ま。ど。も。狼。退。の。身。の。武  
 具。踏。費。の。當。も。ぬ。く。詮。方。つ。さ。て。女。児。登。系。と。九。条。の。花。街。ハ  
 抱。女。ハ。焦。其。黄。金。と。も。て。身。の。回。と。側。ハ。真。ハ。下。る。後。女。児  
 登。系。ハ。相。妻。と。て。花。街。ハ。お。お。て。名。立。の。媚。妓。と。なり。園。系  
 典。市。の。児。子。固。情。と。助。とい。る。よ。源。く。列。條。た。る。一。系。あ。ま  
 ども。文。藝。多。ふ。お。よ。べ。ば。け。ま。と。暗。す。と。け。正。法。の。妻。ハ。け  
 后。壬。生。の。小。猿。と。い。へ。る。盜。賊。の。妻。と。なり。奉。添。ハ。末。の。巻。と  
 関。して。知。る。べ。し。

却。後。よ。牛。若。丸。の。任。ま。さ。し。鞍。馬。の。山。道。を。出。所。身。と。權  
 限。を。家。の。攝。次。が。も。と。よ。忍。び。け。世。上。の。名。は。は。ア。合。福。源。家



空縁の常陸國の任人源頼朝の左番頭ふよつて  
 國許へ立廻る日努よ折る三條橋次しうともいふららひへ  
 下らんと以り兼安四年三月三日の曉も牛若丸九十六歳にして  
 京三條橋次が家を発足あるは時牛若丸橋次の在る井も  
 ふみちをきひまひしとて後年牛若丸首途の井として今もまを  
 京橋井の辻に砂りり。使まて牛若丸橋次が津に忍びおひす  
 うち。女児橋本ハかねて志慕ひし牛若丸家よ到りたまへ  
 こそ月卜老人の逢合といひさうは私情と通じかたは後まを牛  
 若子も若木ならねば遂に橋本が志しおひりて彼の契りと結ひ  
 たまひし如ふ今奥に下向とす。橋本ハ余波と惜しむ備ふ  
 退人と跟まといふ。故まをさくえぬまを牛若丸大いに結る後

家としても名残ハせせども往て叶ぬ東の旅志ハ一の  
 列まとおほさまよ那地はあつくものまらひ橋次よておめて  
 運の人を越とべきそとさまどく小宿めさうしてやうくと教  
 女児よ引子をまを立出栗田に十彈作の列當経因といふ  
 相換國の任人波多野二郎義道の五男よて源家よ所縁の  
 ものまをハ極周のものもきていり源頼朝と助と為合一同  
 又東國下向と始し作まハ橋次と俱に三條通を栗田にへと  
 志す折りり。関係な市法基ハ栗田にり居りかけろに橋  
 かつ向あはたませまる牛若丸乾川の流を蹴蹴く渡らせ入  
 細流まよと市も馬と歩入互ひよ移り川流の回けしむ  
 馬よ蹄よるみ玉牛若丸の肩先よりあ剣の至て一一不

行傳記史記書卷之三



狼藉ありと立傳平家の士と云ふは切折異人つと瞋眼  
 のひしげ思案と回らしさあらぬ風情は裳衣と後においす典  
 市の流石古兵はどありげなりけり冠衣よあとかけられぬが  
 さうぬくほへるその形勢只者よていあふううずと赤まを  
 弓の足日し川瀬をよふ戻し這回ハ始の怪およはうして特と  
 踏とてあ勿うけ初舞と窺ぐ馬上の典市牛若こそは  
 へん向もやらす信忠の文字と胸よ居へ行よまへ典市の  
 いらく勢ハ測し瀦まり時と待て天よいたる竹人ハあふとれ  
 とも行末天下よ名と取ハこん今のと云ハ看免あまとも義者  
 の眼力今の世と三糸通は限となく所ハ踏上と鳴ませしと  
 け知ととせへらるるまう播次深掘法ハ東流さて下られり  
 三之巻 早

百家  
 通 用  
 文 章  
 大 全

純章堂業  
 美揚齋画  
 全二冊

次紙摺 一冊八分  
 上紙摺 一冊五分

此書は諸家日用の書れ一切文章のそとて紙代育とて撰の文章を  
 設け書中要語の虫智ハ各書と厚以著し論文子取の初ハ各書故  
 実と徳方と本一或ハ後馬色紙短冊小法記式法第物用字と一  
 其作とて筆道の肝要有益事と投多抄出して洩らけりとて  
 其家よ使ハ実小子迷案又の規則書通抄古ハ玉窓世ふぬる  
 け及家沖免上梓して普く海内におもむ實ハ四方の法君子て  
 重宝を二便利随一をもとと致味ハ一とと謹白

板元書林  
 賣弘所

大野木實文堂  
 京江戸大坂その他諸國津浦海沿の書林何れも  
 指かしの存りる各書子書とて中取の法とて



